



TITLE:

京大広報 No. 158

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 158. 京大広報 1978, 158: 757-762

ISSUE DATE:

1978-05-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209531>

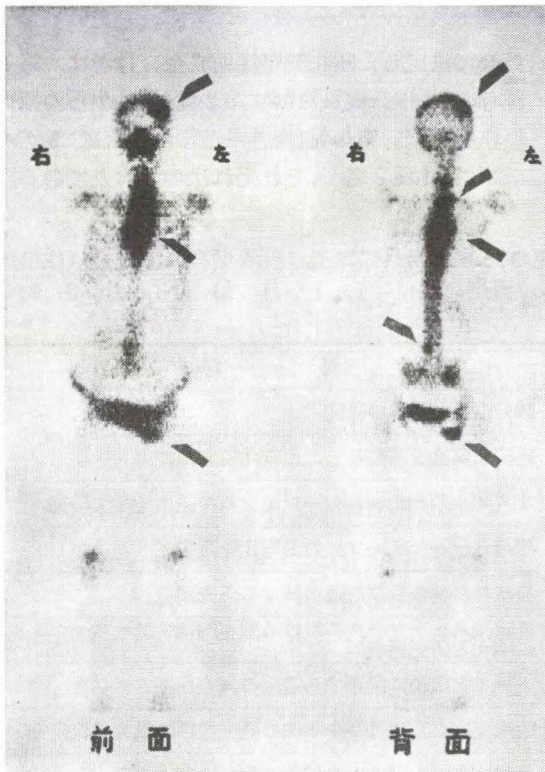
RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

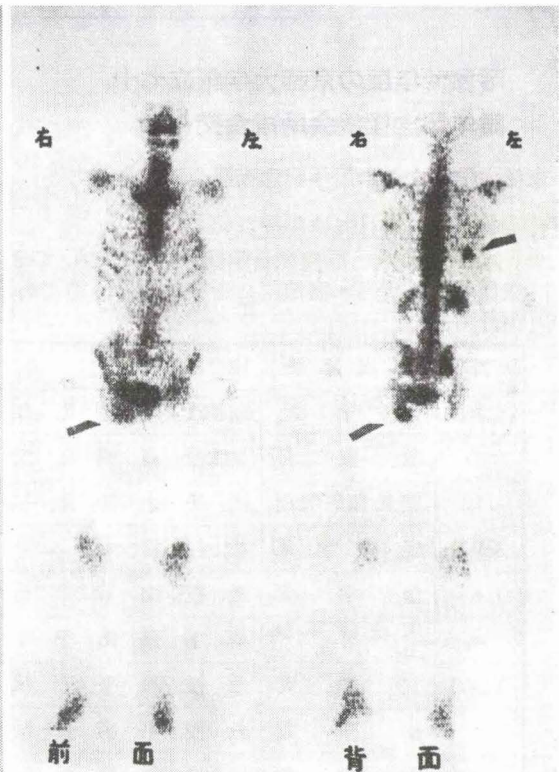
No. 158

京都大学広報委員会



乳癌の骨転移症例の ^{99m}Tc -リン酸化合物による骨シンチグラム。

骨転移巣（矢印部）が多発性に認められる。



前立腺癌の骨転移症例の ^{99m}Tc -リン酸化合物による骨シンチグラム。

骨転移巣（矢印部）が多発性に認められる。

放射性同位元素による癌の骨転移巣の早期診断 一関連記事本文5ページ〈紹介〉一
(医学部附属病院提供)

目次

昭和53年度入学式	2
昭和52年度の京都大学	
創立七十周年記念後援会助成金交付者	2
フンボルト財団 F. リネン総裁らを迎える	3
学生部長の交替	4
防災研究所附属・水資源研究センターの設置	4

医療技術短期大学部の入学式	4
薬学部長の交替	5
〈紹介〉医学部附属病院・新R I 診療棟	5
〈随想〉京大に薬学教育機関の設置されるまで	
名誉教授 富田 真雄	6
計 報	6

＜大学の動き＞

昭和53年度入学式

4月11日（火）午前10時から、昭和53年度学部入学式が、また、同日午後3時から大学院入学式が本学総合体育館において挙行された。

この日の学部入学式は、名誉教授、教職員、新入生の父兄など多数の臨席のもとに盛大に行なわれた。式典は「学歌斉唱」に始まり、「総長のことば」に続いて学生部長、教養部長、体育会代表

から「新入生歓迎のことば」がのべられ、午前11時30分に終了した。

今年度の学部新入生は、文学部 200 名、教育学部 50 名、法学部 337 名、経済学部 201 名、理学部 277 名、医学部 122 名、薬学部 77 名、工学部 937 名、農学部 286 名の計 2,487 名で、うち女子学生は 190 名である。そのほか、3 年次に 21 名の編入学生を迎えた。また、大学院 新入生は、修士課程 938 名、博士課程 103 名である。

昭和52年度の京都大学創立七十周年記念後援会助成金交付者

京都大学創立七十周年記念後援会助成金選考委

員会で決定した昭和52年度助成金交付者は、第 1 種（海外派遣研究員）19 名、第 2 種（海外からの招へい学者）5 名、第 3 種（海外派遣学術調査隊）3 グループ、第 4 種 2 名で、それぞれ次のとおりである。

1. 第 1 種（海外派遣研究員）

本学教官が、専攻する学問分野等について研究のため、海外に派遣される場合に助成金（往復航空賃および日当・宿泊料）を交付するものである。派遣期間は 1) 1 か月 2) 約 3 か月 3) 約 6 か月である。

派遣期間	所 属 部 局	職 名	氏 名	研 究 題 目
6 か月	理 学 部	助教授	足 立 正 久	微分位相幾何学の研究
〃	教 養 部	助教授	高 橋 正 立	経済本質論を基底とした比較体制論の研究
〃	霊長類研究所	助 手	小 嶋 祥 三	リスザルのコミュニケーションの神経生態学的研究
3 か月	経 済 学 部	教 授	橋 本 勲	流通とマーケティングの国際比較研究
〃	農 学 部	教 授	山 下 律 也	農産物の乾燥及び貯蔵に関する研究調査
〃	大型計算機センタ	助 手	飯 田 記 子	計算機ネットワークにおける効率的なリソース・シェアに関する研究調査
1 か月	文 学 部	教 授	松 平 千 秋	ドロイア伝説に関連する遺跡の調査検証
〃	法 学 部	教 授	平 場 安 治	欧米諸国の刑法及び少年法の研究並びに教育状況研究
〃	理 学 部	助教授	村 松 繁	免疫応答における大食細胞の役割に関する研究
〃	医 学 部	助教授	中 村 泰 尚	視覚系シナプス構成の研究
〃	薬 学 部	教 授	犬 伏 康 夫	天然物化学特にアルカロイド及びテルペン系化合物の研究調査
〃	〃	助 手	吉 田 あ や	桂皮類生薬基原植物 Cinnamomum 属の植物分類学的研究
〃	工 学 部	教 授	福 井 謙 一	量子化学に関する研究調査及び「ウプサラ大学創立 500 年記念量子化学シンポジウム」において招待講演、討論
〃	〃	助 手	和 田 一 洋	レーザー同位体分離に関する研究調査及び国際会議に出席
〃	農 学 部	教 授	坂 本 慶 一	農学の原理と思想に関する研究調査
〃	教 養 部	教 授	足 利 末 男	ドイツ社会統計学の学説史研究
〃	化学研究所	助教授	小久保 正	国際ガラス会議出席及びガラス工学に関する研究調査
〃	東南アジア研究センター	助 手	山 影 進	東南アジア諸国連合とその加盟各国との関係に関する資料収集と調査研究
〃	ヘリオトロン核融合研究センター	助 手	本 島 修	プラズマ物理に関する国際研究会等に出席

2. 第2種（海外からの招へい学者）

海外から学者を本学に招へいし、講義・研究指導等を依頼して、その分野の研究発展をはかるために助成金（往復航空賃、鉄道賃および滞在費）を交付するものである。招へい期間は、原則として2～3か月である。

受 入 部 局	招 へ い 学 者 名	国名・所属機関および職名	研 究 題 目
文 学 部	Jacques May	スイス国 ローザンヌ大学教授	「インド大乘仏教の哲学思想」の研究
教 育 学 部	Friedrich Kummel	ドイツ連邦共和国 ロイトリンゲン教育大学教授	教育人間学及び哲学 —現代における人間存在の危機 と教育の可能性の問題—
法 学 部	Tawee Muennikorn	タイ国 タマサート大学助教授	近・現代タイ国の政治、経済構造 の分析
教 養 部	Michel Vié	フランス国 パリ第三大学助教授	現代日本の社会構造と社会変動の 研究
防 災 研 究 所	Jean Biarez	フランス国 エコール・サントラル・ ド・パリ教授	地盤災害に関する研究

3. 第3種（海外派遣学術調査隊）

海外に滞在して調査研究を行なう本学の学術調査隊であって、原則として国費などの支給を受けるものを対象として、助成金（所要経費の不足額の一部）を交付するものである。

代 表 者	調 査 名
教育学部教授 小林 哲 也	海外における日本人児童の学習と適応に関する比較研究
工学部教授 加 藤 進	I S レーダーによる赤道域大気の力学的結合に関する調査
霊長類研究所教授 河 合 雅 雄	エチオピアにおける現生ならびに化石霊長類に関する総合的研究

4. 第4種

総長および総長が、大学行政上特に必要と認めたものの外国出張に対し、助成金を交付するものである。

職 名	氏 名	期 間	派 遣 目 的
総 長	岡 本 道 雄	15 日	中国における学術の現況視察
附属図書館長 (法学部教授)	林 良 平	7	イギリス、アメリカの大学及び国立図書館事情調査

フンボルト財団 F. リネン総裁 らを迎える

さる4月19日、西ドイツのフンボルト財団F. リネン総裁、H. プァイファー同事務総長、ゲッティンゲン大学 G. パツィヒ教授ら関係者15名を迎えて、本学主催の歓迎レセプションが、夕刻から清風荘で開催された。一行は4月20日から22日まで国立京都国際会議場で開かれたフンボルト留学生学術交流会出席のため、入洛したものである。

この日のレセプションには、本学からは岡本総長をはじめ、かつてフンボルト留学生であった本学教授ら関係者多数が出席し、岡本総長、F. リネン財団総裁のあいさつに続いて、約2時間にわ



たり留学当時の思い出話等、なごやかな歓談がなされた。

なお、フンボルト財団の主催によるフンボルト

留学生学術交流会は、同財団の招致による元留学生約550名を集めて開かれたが、20日夕刻にはドイツ連邦共和国シェール大統領の臨席を得て、大統領主催のレセプションが、21日夕刻には文部省

木田事務次官、岡本総長、日本学術振興会天城理事長らの出席を得て、文部省、京都大学、日本学術振興会の三者共催による歓迎レセプションが、国立京都国際会議場で行なわれた。

学 生 部 長 の 交 替

4月22日、異友正学生部長の任期満了に伴い、その後任として沢田敏男農学部教授（農業施設工

学講座担当）が任命された。

任期は、昭和54年4月21日までである。



＜部局の動き＞

防災研究所附属・

水資源研究センターの設置

昭和53年4月1日付け文部省令第10号によって、京都大学防災研究所附属水資源研究センターが設置された。

日本学術会議は、次のような認識のもとに、第58回総会の議に基づき、昭和46年5月1日付けで政府に対し、全国科学者の共同利用の研究所として水資源科学研究所（仮称）の設立を勧告した。

「人類と水との結びつきはきわめて密接であり、人類はその生存と福祉の向上のために水を正しく管理しなければならない。わが国の水資源は限られており、近年の水不足や水質汚濁にかんがみ、資源としての水に関する研究が強く要望されている。それには地球上の水循環に関する科学が基礎となるが、さらに、水資源の実態、水資源の確保、水資源の保全などに関する基礎科学を総合的に推進することが必要である。」

さらに、同会議から、京都大学に対して、この共同利用研究所を附置することの依頼があった。本学では、関係諸機関に諮ったのち附置の方針を決定するとともに、学内に水資源科学研究所設立準備連絡会を設け、防災研究所を世話部局として、昭和48年度より概算要求を提出してきた。

その後、社会経済情勢の変化によって、その内容が共同利用研究所から共同利用研究センターへ変遷したが、永年にわたる関係部局や関連機関の

協力によって、本年度、全国科学者の共同利用の性格をもつ水資源研究センターが防災研究所に附置されることになった。

水資源研究センターは、現在、所内の改組による振替4名を含めて、教授2、助教授2、助手1、事務官1の6名の定員である。共同利用の実をあげるために、学外、学内の委員から構成される運営協議会を設け、運営に当たることになっている。少ない定員のために、日本学術会議の勧告にある研究内容を全面的に開始することはできないが、当面の研究目標と主要な研究事項はつぎのとおりである。

研究目標 水が一時に多量に集中すると水害となり、少量の水しかないと水不足を来し、また汚濁されると水環境が悪化して人間生活に多大の支障を与える。防災研究所における水問題の研究分野は従来水害の研究に集中していたが、更に人間が利用し、または利用しようとする水資源を自然と人間活動の両面から総合的、有機的に捉えた研究を、理学、工学、人文社会科学の関連の専門家が共同して集中的に行ない、水害の研究と相まって、水と人間とのかかわりに関する学際的新分野を発展させる。

研究事項 (1)陸水循環の観測と理論 (2)河川水および地下水の変動と渇水限界 (3)水利用形態の構造と節水限界 (4)水資源システムの構造と応答特性 (5)水資源の水量水質の監理システム (6)水の価値 等。

(防災研究所)

医療技術短期大学部の入学式

4月12日（水）午前10時から、本学講堂において、昭和53年度入学式が、来賓、教職員、新入生

の父兄などの臨席のもとに挙行された。

今年度の新入生は、看護学科50名、衛生技術学科36名、専攻科助産学特別専攻16名計102名である。
(医療技術短期大学部)

薬学部長の交替

5月1日、井上博之薬学部長の任期満了に伴い、その後任として中垣正幸薬学部教授（薬品物

理化学講座担当）が任命された。

任期は、昭和55年4月30日までである。

（薬学部）

<紹介>

医学部附属病院・新R I診療棟

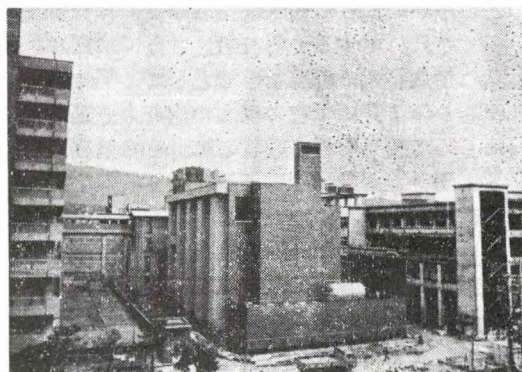
放射性同位元素（Radioisotope, RI）の臨床利用は、ここ二十数年の間に急速に発展し、核医学（Nuclear Medicine）という専門分野が、臨床放射線医学の一分野として確立されるに至っている。

R I診療は、R Iを追跡子として用いる検査的利用と大量投与による治療的利用に大別される。R I検査はまた、R Iを各種疾患患者に投与して、その体内での動きを非侵襲的に体表外から計測して、動きと分布を得て、電算機処理などによって、臓器の機能と形態、全身における代謝などを知らうとする in vivo 検査と、試験管内で微量のホルモン、活性物質などをラジオイムノアッセイなどにより測定する in vitro 検査に二大別される。

医学部附属病院では、昭和36年7月、中央診療棟地階に、中央放射性同位元素診療部が設置され、R I診療は中央化されて実施されるようになった。昭和39年、放射線部の設置により、そのR I部門として再編成され、各診療科との密接な協力と診療部員の努力によって、検査項目および検査件数は着実に増加し、昭和51年度には検査件数は43,000件を越え、従来の施設では運営に支障を来すに至った。そこで、数年来、その移転が検討され、今回のR I診療棟の新営となったものである。

新R I診療棟は地下1階、地上4階、総面積2,480㎡を有して、国立大学附属病院としては、最大の規模を誇っている。1階の大部分は患者待合室、診察室、データ処理室、職員更衣室などの非管理区域にあてられ、2階はin vivo検査用として、シンチカメラ室2室、体表外計測室4室、暗室、診断室より成り、殊にシンチカメラ室はX線検査も同時に行ない得るよう、またサイクロトロンによる超短寿命のポジトロン放出核種も使用し得るよう、コンクリート隔壁30cmの2室を設け、

その中間に両室の操作室が設けられている。3階はin vitro検査用として、化学室5室、高レベル室、低温室、無菌室、測定室が配置され、地階には既設のヒューマン・カウンタが移転・設置され、またR I貯蔵室、R I小分け室および廃棄物保管室がおかれ、廃棄物は床下ピットに保管され、保管室内の空間線量をなるべく低くするように設計されている。また近い将来、超短寿命のR I製造のサイクロトロンの設置が計画されている。



R I廃水処理は3系統に分かれ、高レベル排水は50tの減衰槽方式により、約1.5年間の放射能の減衰を期待し得るようになされ、中レベル排水は2基の50t貯溜槽、R I便所排水は2基の20t貯溜槽、その他に20tの希釈槽が設置され、これらの槽は地上設置となっている。またR I排気処理は、高レベル系、中レベル系、コールド系、尿尿処理系と各系統別に分け、4階のファンルームで浄化して処理されることになっている。

本R I診療棟は、R I取扱いの安全管理がもっとも配慮されて設計され、本学放射線障害予防小委員会、放射性同位元素総合センター、施設部の多大の指導と支援を得ており、ここに記して謝意を表する。また本診療棟が完成（本年5～6月診療開始予定）のうちは、本院におけるR I診療を各臨床科の協力を得て、更に充実、発展させるよう努力していきたいと考えている。

（医学部附属病院）

